

“福祉のお仕事”考

—高齢長寿社会において問われる人間の資質—

Thoughts on Our Welfare Work

—Human Endowments Desired in the Aged Society

横山孝子*

Takako Yokoyama

1. 日本人の病気観：これでよいのか「上げ膳据え膳」の病人扱い

1) 電動車いす

ある年の春、車椅子の新入学生と話すチャンスがあり、「よく勇気を出して、家を離れて大学で勉強しようと、がんばってきたわね。」という、学生は「親はとても心配で手放してくれなくて、このまま何もできない人になっては困ると、やっと説得してきました。親は電動式の車椅子にしたらというのですが、そのほうが便利でいいでしょうか。」と聞いてきた。私はあわてて「便利そうでいいと思うでしょ、ところが実は大損なのよ。車椅子を操作して、自分の体重を自分の力で移動させるくらいに、腕の筋肉をいつも鍛えていることが重要なよ。そのおかげでトイレに腰掛けたり、自力でベッドに移動する力が出せるのだから、長く自立生活をしたいなら、今のように車椅子をこいだほうがいいと思うわよ。やがて頑張って乙武さんのように、自動車の運転ぐらいできるようになって、車椅子を積み込む力も必要だからね。」という、びっくりして「そういうものですか」と去っていった。やがて彼は実際に自動車免許を取って、運転するようになった。

昨年のごと、特別養護老人ホーム「のべやま」でのオンブズマン会議の折、家族からの苦情の扱

いとして出された話題に、「今、何とか車椅子を自分で操作し移動できる80歳のSさんですが、息子さんが電動車いすを買い与えたいといわれ、『それでは今使えている手足が弱ってしまうので、電動にしないほうが良いのですが』と申し上げると、『家族が買ってやるというのに施設から反対されるのはおかしい』と苦情が来て困っている」というものがあった。オンブズマンの一人として気がかりで、その後の事を聞いてみると、何回かのやり取りがあったものの、結局Sさんはボタンひとつの操作ですむ電動車いすを使い始めた。はじめはよさそうであったが、3ヶ月もしないうちに手足の力が弱り、トイレでの排泄もなくなり、食事も自力ではできない半寝たきり状態になってしまったという。めったに顔を見せない息子は、痛々しい姿で車椅子を操る親への罪滅ぼしに、電動車いすはさぞ便利だろうと考えたようだとのことである。しかし最終的には「父親に長い寝たきり状態をプレゼントした」ことになってしまった。本当の本人の幸せを支えることのむずかしさ、ニーズの扱いの難しさを痛感させられたといていた。

2) 自立と依存の支え方

私にも苦い経験がある。平成八年のころ、我が家の義父も要介護状態となり、入退院を繰り返し

* 社会福祉学部助教授 (2006.3.31退職)

たのちに在宅介護を行っていた。まだ介護保険制度が始まったばかりで、「何でもやってあげるやさしいケアこそ大事」というホームヘルプが主流で、「自立支援」や「もてる機能の活用」などの思想は行き渡らず、それぞれの担当者が手探り状態で、介護を進めているようであった。在宅介護支援センターから紹介された、我が家担当の訪問介護のヘルパーのAさんは、ベテランでそれは親切な方である。しかし週2回の訪問ごとに「さあ、私に何でも任せてください、ご自分では何にもしなくていいですからね」と、右手が利くことなど気にかけず食事も全部食べさせてあげ、体を拭きオムツを上手に替えるなど、大サービスをしてくださる。老人とはいえ車椅子の人を抱きかかえながら、立ち上げてオムツをはずし、便座に座らせることは容易ではないものの、それまでは排便の時はトイレに誘導していた。しかしだんだん本人の訴えがなくなり、オムツオンリーになっていった。その上さらに、時々訪れる実の娘も、「年をとって病気になった時ぐらい、食事を養ってあげなければ」と、「はい、お父ちゃんアーン」などと食べさせてあげてしまう。やがて案の定、じきに義父は自らは手を動かさず、食事の時はサジを渡しても食べようとせず、口をあけて入れてくれるのを待つようになり、「耳の後ろがかゆいから搔いてくれや」というようになってしまった。その娘や息子たちに「右手が使えるので、できるだけ自分で食べてもらうほうがいいんですが・・・」などという嫁は、家に病人が出ても勤めも辞めないで、他人に看させて、「ろくな介護もしないダメ嫁」という評価になる始末。「介護の社会化」など程遠い感があった。

家族の誰かが病気になると、「病人は病人らしく何もしないで安静に寝ていること。介護する者はいかがいしくとことんお話し、上げ膳据え膳の優しい介護をすること。」と、昔から日本人には、こういった病人と介護者のイメージが出来ている。特に親子の間には「かわいそう」という思いが先にたち、保護しなければと思ってか、目の前の姿にとらわれて、“先を見据えた長期のゴールを目指す理念”が通用しない。本人の行動を中心に我慢して待ちつつ、「自立」を見守ることの重要性について、日本人は訓練されてこな

かったからである。真の利用者主体、心の自立を支えるケアは前途多難である。

デンマーク在住の日本人の友人は、「デンマークの介護職のプロは、利用者の脇に立って見守るだけよ。言葉でほめたり励ましたりしながら、本人が何とかして立ち上がるのを、絶対手を貸さずに見守り、本人が自力で動作を獲得するのを待っている役割よ。」といていた。「ケア目標」をキチンと定め、「寝たきりにさせない、ならない」を目指して、これが本人の将来の幸せにつながると、双方が納得しているから手を貸さないのが当然なのだという。本当の福祉の役割とはなにか。「甘えや依存」と「自立」の使い分けの実践を積み重ねつつ、日本人の意識の開放を少しずつ待つことなのだろう。

しかしまた一方でわたしは、この義父の介護において、訪問看護のBさんには大変助けられた。そのころ我が家では在宅介護の継続のために、実家の母（当時85歳）が手伝ってくれていたのだが、Bさんは処置などでわが家にいる2時間くらいの時間に、公用車の中からホットバックを持ってきては、足腰の痛みがちな母にこれを着用させて、体を温めて寝かせていてくれたのである。薬が終る頃には来る途中で薬ももらってきてくれるなど、主たる病人の世話のみならず、家族・介護者に気を配り、介護を抱える家族をも丸ごと保護して下さった。これぞ望ましい訪問看護のありようだと思われた。今のように訪問看護に時間制限や内容の吟味が規定されておらず、むしろ理想の在宅介護の時代が来るかと、介護保険制度に明るい期待を持たれた時期であった。

しかし5年経った最近の介護保険の成り行きは、とてもこのようなことは望めない、厳しい制約を余儀なくされている。これでよいのか日本人、これでよいのか福祉の将来と情けない思いである。

2. 自己実現を支える役割：小倉遊亀 再びの絵筆

私の大好きな日本画家、小倉遊亀は50歳代ですでに「日本芸術院賞」を受賞したほどの女流画家で、2001年105歳でなくなった。「春の院展」には、100歳を超えてもすばらしい絵が展覧されて

おり、毎年楽しみにしていた。

彼女が亡くなる少し前の年、展覧会場の売店に、珍しく彼女の画集ではなく「天地の恵みを生きる 小倉遊亀 百四歳の介護日記」という本があり買い求めた。当初は単に遊亀さんの闘病日記かと考えていたが、むしろ介護の教科書にもしたい、人間らしさを追及する家族と介護職によるすばらしい介護日記であった。

書いたのは彼女の孫に当たる小倉寛子さんと、遊亀さんの画室から1分の近さに寛子さん一家は住み分けて暮らし、寛子さんは東京の出版社に勤めていたという。それまでの遊亀さんは、そば付きの人と住み込みのお弟子さん、食事を作ってくれる人と一緒ではあるものの、身内に頼らない一人暮らしで、いつもカクシャクと身ずまい正しく、絵や書をしたためる毎日であった。

しかし平成四年97歳の時、“自分の息子（養子ではあるが、寛子さんの父親でもある）の死”という悲嘆体験を契機に、とくに脳卒中などの深刻な病気ではないのに、食欲がなくなり動く意欲も失って、半寝たきり状態になってしまったそうである。家族は「この芸術家をこのまま終らせたくない」という思いで、プロの介護職を利用しながら再起を願って工夫を重ね、5年がかりで再び遊亀さんが絵筆をにぎり、見事な「マンガーの絵」が完成するそれまでの、介護の様子を書いた本なのである。

聖路加病院から退院するにあたり、主たるケアは専門の訪問介護士を頼み、これを助ける形で寛子さんも祖母の家に泊まりこみ、在宅ケアすることになった。平成四年というからまだ介護保険制度は施行されず、その前夜といった時期で、社会も訪問介護・看護の模索が始まっていた。

しかし、家族の一番の悩みは、遊亀さんとの相性がよく、「生き生きとした生活」を支えてもらえる介護職の確保であった。「介護の目的は命長らえればいいというものではない。生活の質、感性の豊かさを失わせない日常を支えて欲しい」。そんな願いで始まった在宅ケアの人探しは中々困難であったらしい。そしてチームで組むその介護士の方々の支援の仕方の、個人ごとのあまりの違いと、これによる本人の生活内容の違いが、毎日の日記から読み取れて、その中で介護の質のあり方

を寛子さんが考察している。

まず、朝食後の午前中の時間や昼食後の午後の時間の過ごし方に違いが出る。関心のありそうな美術の本や坂東玉三郎の踊りのTV番組などを、タイミングよく「ご覧になりますか」と、気持ちを誘ってくれるAさんの介護では、日中の活動的な時間の量が多く内容も豊かである。そして、水分も麦茶・牛乳・ココアなどと品を替えてくれるので、採る量にも違いが出て、水分摂取回数も格段に多く1日に1200ccはとっている。また従って、しゃんと座位をとっている時間が9時間はある。そして尿意の感覚が薄れがちな高齢者には、頃あいよく声掛けをして誘ってあげれば、トイレで気持ちよく用が足せるわけで、昼間の6回はトイレまたはポータブルトイレで排泄ができています。

一方、同じ時期の介護でも、「昼間は眠そうなのでそっと寝かせていた」というBさんの介護の日は、水分摂取が670ccくらいと少なく、昼間の排泄の5回がおむつ交換になってしまっている。当然一日の座位時間も平均6時間と短くなっている。そして午後に長く寝てしまうので夜が眠れなくなり、睡眠の質が悪くなり、翌日の朝の離床が乱れてしまう。すると次の日まで1日の生活リズムが乱れ、生命の質も悪く悪循環になる。

「座位時間」を指標にするのは、主治医の日野原重明先生が、『生活のしるべ』として、①水・牛乳を飲むこと、②座るか腰をかけている時間を多くする（座位時間）、③手足・指の運動、④毎日風呂にはいる、⑤毎日1回筆を持つこと、と指示してくださっていたからである。この日野原先生の指示の内容もすごい。質の高い『介護目標』が示されている。

高齢者の行動は、自分から何をしたい、トイレに行きたい、何を食べたいなどと意欲を示したり、要求したりすることはまずないので、介護者の配慮しだいである。何の提示や誘導も無ければ、気持ちも動かず居眠りが始まる。タイミングが悪ければ、飲みたくない、食べたくない、やりたくないと拒否もする。それが「ニーズ」だと勘違いしてしまつたら、本当に生命にも関わってきまう。家事援助のなかの食事の献立内容の違いも、介護職の個人差の大きいのに驚かされる。例えば同じ煮物でも大根の煮物と筑前煮では、食材数が

格段に違い栄養バランスが異なってきた、この積み重ねの結果がどうなるかということである。

やがて遊亀さんの病状が安定してくると“精神の充実”が必要となり、どうやったら絵筆を持ってもらえるかが課題となってきた。いろいろなやり取りを重ね、ある時寛子さんは「画室はおばあちゃんが生涯かけて戦ってきた場所で、主が長いこと留守にしているのは、お部屋がかわいそうですよ。」と持ちかけると、「じゃあ、行ってみるか。」と、部屋にはいつてくれるようになり、トイレの帰りに画室をまわり、壺の花が見れるようにするなど工夫をしたそうである。

そして、平成五年1月、画室で育てていたアマリスの球根が4個のつぼみをつけ、まさに劇的な開花の時に会うことになった。すると今まで無反応であった遊亀さんが、その場にくぎづけになって動かず、「紙と鉛筆を早く。それからカメラにこの姿を収めなさい。」「いろいろな角度から。」と、力のこもった声で言われたそうである。1年ぶりに心の焦点が結ばれた記念すべきこの時、遊亀さん99歳であった。でもそう簡単に描くまでにはいたらない。その夏から、病む前に描きかけになっていたマンゴウの絵の完成を願って、夏が来るとマンゴウを画室に飾り、気持ちの動くのを待っていた。なかなかしかしまだ絵筆は持ってもらえないでいた。

ここでも介護士のAさんはすごい、「先生、絵筆をお持ちください。」「さあ、今日はどこからお初めになりますか。」などと、絵筆を差し出しては気持ちを誘ってくれる。そして、「先生は一瞬一瞬を生きておられるので、一回断られたからといっても、いつまでも前のことを引きずってはいけません。あきらめず5分後にこちらが新しい気持ちでお誘いすれば、何回目かには気持ちが動くはずです。」と毎日タイミングを見ては働きかけてくれる。

そういう繰り返しで3年ほどが経過した、平成七年7月下旬。遊亀さんは盆に飾られたマンゴウに「うわあ、きれい」と歓声をあげ、盆への載せ方の指示をだしはじめ、何日か繰り返したある日、マンゴウを見る目つきがいよいよ厳しくなり、何度も前の絵とマンゴウを凝視し、ついに、自ら絵筆を持ち絵に色を入れ始めた。体を前に乗

り出し、鷹が獲物を狙うような視線で、何度も色を塗り替え試行錯誤しつつ、1日2時間もの緊張の製作活動を続けた。そして平成八年9月ついに、十号の「マンゴウ」の絵に「百一歳 遊亀」と落款が入れられて、完成することができた。存在感のある色彩の豊かな、決して妥協の無い、力強い確かな筆致の絵が出来上がったのである。実に5年ぶりの絵筆である。

そして私の手元には、その後の平成十一年6月「第54回春の院展 長野県展」の出品目録があり、『春花』小倉遊亀」が載っている。すなわち、それから4年間絵筆をとり続け、毎年春の院展に小倉遊亀の明るい絵を見ることができた。「これが見たくて毎年見に来る」という常連も多かった。こんな風に最後まで自分の力の限り、納得のできることをやれるなんて、うらやましい人生である。そしてたぶん、女流画家が再び絵筆を握り、自己実現を果たすに至るまで工夫を重ね、精一杯ケアを続けた寛子さんもAさんも、「支えあった達成感」といった、各々の自己実現が果たせたのではないだろうか。

私たちはとかく年齢や病状でその人の行動を規制し、その人の潜在的可能性に蓋をして、あきらめの人生を押し付けて、幕を引いてしまいがちである。本人の自己実現ばかりか、これではケアする側も役割の中で自己実現できず、誇りも持てない仕事の継続になってしまう。高齢化が急速すぎて、長寿時代の過ごし方に慣れない日本人は、自己実現のてつだい方がわからず、どう支えあって老いを生きあつたらよいのか、まだまだ試行錯誤や、失敗を繰り返して関わり方を高めてゆく、今が過渡期の「福祉の時代」なのであろう。

しかし、寛子さんのように、一般の人がこのように介護・福祉の仕事に、人間らしい感覚で、当然の要求として厳しい評価をする時代が来っているのである。

3. ケアの質

1) 排泄介助と人間性

10年前のある日、私は「ご主人のガンはかなり進行しています。あと数ヶ月かと思われれますから、覚悟していたほうがよいですね。」と、夫の

主治医に呼ばれ宣告された。そんなに急に進行してしまっただのかと戸惑い、震える体の維持に窮していると、外来の看護婦がそっと後ろから私の肩を抱いて「大丈夫よ、私たちが応援しているから何でも言ってね」と支えてくれた。こみ上げる涙をこらえて外来を出て、トイレで心を落ち着かせたのだが、病院というところも泣く場所がないものだとつくづく思った。結局しかし夫の肺ガンはそれほど急性ではなく、前の主治医が「進行性ではなく、ゆっくりのタイプで5年以上は大丈夫なので治療法を探しつつゆきましょう」と言ってくれたように、しばらくがんばって生きてもらった。そして、あの時さっと肩を抱いてくれた彼女のケアは、「神にもすがりたい思い」を満たしてくれるような癒し力をもっており、まさにプロの看護だなどいつまでも忘れられない、感謝の一言になっている。

その夫がまたある日、私が夕方家に帰ってみると、ひどく苦しそうに横になっている。聞くと「昼ごろからおしっこが出なくて、もうはちきれそうだ。やっぱり苦しいから病院に連れてってくれ、我慢ももう限界だ。」という。あわてて急患で受診し、導尿処置をしてもらい、入院検査となったのだが、問題はその後の出来事である。3日後、夫の頭には円形脱毛症の丸い地肌が現れていた。ストレス性の脱毛である。痛みの強さで受診せざるを得なかったが、できれば人には絶対見せたくない部位を、処置や検査で見られ触られるのだから、どんなにか恥ずかしくつらかったに違いない。「排泄」に関わる治療やケアの難しさ、感情のある人間の大変さを改めて教えられた。

つまり、「恥ずかしさ」をあきらめるとストレスとして身を傷つける。排泄にまつわるケアは手技の上手下手の問題以上に、自体そのことへの重大性を秘めている、という認識を忘れてはならないのである。高齢者だって同じ感情が流れている。排泄の自立で何回か失敗はあっても、施設入所者も安易にオムツにするべきではない。できるだけトイレで排泄できるように誘導し、人間らしい羞恥心を保護し、自立的排泄を維持させてゆくことがケアの役割である。

一旦羞恥心を奪われると、人は心を閉ざし無表情となって、感情を抑え尊厳も失ってゆく。認知

症を作り、作られていってしまう。また、ある慢性病棟で、オムツ歴3年以上の高齢患者さんに、排泄パターンのチェックのうえ、早めのトイレ誘導を3ヶ月続けた結果、10人の全員が尿意や便意を取り戻し、介助を受けながらもトイレで排泄ができるようになり、なんと、仮面様顔貌がなくなり、会話や笑顔が出て、車椅子などで移動できる人も現れた、という報告があるのである。

2) 「笑いの効用」の活用

「介護技術」は、単にベッドからの移乗や体位変換、おむつ交換などの手技だと考えられがちであるが、看護も介護も相手が人間であれば、小手先のテクニックだけでは癒されない、生身をゆだねられることへの敬虔な心と、責任を負ってなされる行為である。

特にこれからは、高学歴・経験豊富でハイレベルな生活歴の高齢者が、長期に渡りケアの対象者になるわけで、この方々の満足度を満たすには、かなり高度な力量が要求される。心を開くコミュニケーションと、適切な介護技術によるふれあいをいかに提供するか、福祉全体の課題であろう。そして、家族以上のケアができないと、「介護はプロに、家族は愛を」という介護の社会化は、こちら側の遅れから実現できないことになる。ケア目標を定めたケア技術をおろそかにして、福祉専門職とは言えない時代である。

そして、満足度をどう推し量るか、快適感の尺度のひとつに「笑い」の頻度が示され始めている。ある大学病院でナースの人気ランキングを調べた結果では、患者さんから一番人気のあったのは、「よく笑うナース」であったという。注射が上手とか、美人であるとか、キャリアなどはまったく関係が無く、「笑顔がクスリ」だという結論となったらしい。

映画評論家の故淀川長治さんは、大学病院に入院した時、とかく多忙で取り付く島が無いように、無表情でつけんどんなナースが多いと感じ一計を案じた。「このドアを開ける人は笑顔で入ってください」と書いたメモをドアにはったのだ。すると効果は適面で、その病棟のみならず病院全体に笑顔が広がって、淀川さんは病院長から感謝状までもらったそうである。飛び回っている

ナス自身が、自分の無愛想なことに気づかなかったのが、ドアを開けるそのつど身を正せた点からも、良い結果が生まれたに違いない。

事実、上方演芸のお笑いをみた後の人間の血液中には、がん細胞を抑制するナチュラルキラー細胞を増加させたり、エンドルフィンといった鎮痛作用を持つ物質が出て快感がます、などの実験研究報告がきかれ、笑顔や笑いの効用が明らかになりつつある。この“ドアへのメモ”などはそっくり福祉の現場に活用したら、ケアの質の向上策になろうというものである。

3) ユニットケア

特別養護老人ホームでは厚生労働省の指示もあり、全室個室で10人単位ごとにキッチンなどのついた交流スペースのある、ユニットケア方式を新たに再構築した老人施設が多い。しかし、その使いこなしは難しいものがありそうである。ユニット広場で仲間と交流しゲームや軽い体操などをして、昼間はできるだけ起きていて、人と関わってもらおうという主旨のはずである。しかし、実習指導の巡回訪問などで、施設の広場などを案内されるが、立派な交流広場であるもののお年寄りの姿が無い。「今は皆さんどちらに？」とうかがうと、「食事やお茶以外は皆さんが自室に戻りたいというので、あまり広場にいることがなくなってしまって・・・」と職員も困っている。こうした所では学生がレクリエーションを計画して呼びかけても、反応が弱く参加者が少ないことが多いようである。みんなでやるレクの楽しさを知らないようなのである。果たしてこれを「やりたくないというニーズだから」といってよいのだろうか。一見個室で自由にらせるなんて理想的だ、と若者感覚で考えがちだが、ある日1日というのではない。ずーっと毎日一人で、限られたものしか無い部屋で、仲間もできずにどんな自立的な暮らしが継続できるというのか。仲間ができず孤独感ですごすのが最もつらい問題だと思われるが、それを克服できるエネルギーがあるお年よりは入所してはこないのだ。ユニットケアは「少人数のまとまりで交流のチャンスを多くし、仲間を持てる機能を活かしあって、少しでも豊かに家族的に暮らす」ことを支援するために、導入されたシス

テムのわけである。昼間から個室に収めてしまっ

て無刺激でいて、どういうケアができるのか、認知症を促進しなければよいかと、気がかりとなってくる。

4. 宮澤賢治の世界：「農民芸術概要」[雨にも負けず] にみる福祉観

「アメリモマケズ」「夜鷹の星」「銀河鉄道の夜」など、多くの人を引きつけてきた宮澤賢治は、大正13年29歳でこれらを書いている。それから亡くなるまでの約10年間で、劇「植物医師」や「春と修羅」など126編の詩や物語を、書き残しているというから驚きである。彼は農業科学や稲作法、農民芸術などを追及し、貧困にあえぐ農家・農村の生活を変えるべく、花巻農学校で農業青年を教え、若者と語り合っている。この若さで大きな宇宙観を持ち、常にいのちや生態系を意識し、農村・農業の役割を追求していた。

私は「春の修羅」第三集の「稲作挿話」が好きである。

「あすこの田はねえ あの種類では窒素があんまり多すぎるからもうきっぱりと灌水を切ってね 三番除草はしないんだ それからいいかい 今月中にあの稲が 君の胸より伸びたらねえ・・・

しっかりやるんだよ これからの本当の勉強はねえ テニスをしながら商売の先生から 義理で教わることではないんだ 君のようにさ 吹雪やわづかの暇で 泣きながら 体に刻み込んでゆく勉強がまもなくぐんぐん強い芽を吹いて どこまで伸びるか分からない それがこれからの新しい学問の始まりなんだ ではさようなら 雲からも 風からも 透明な力が その子供にうつれ・・・」と言うくんだりが好きで、これは農業賛歌であり、若者への応援歌であると思う。

また「農民芸術概論綱要」という詩の序論では、

「俺たちはみな農民である ずいぶん忙しく仕事もつらい もっと明るく生き生きと生活をする道を見つけない 近代科学の実

証と求道者たちの実験とわれらの直感の一致において論じたい 世界がぜんたい幸福にならないうちは 個人の幸福はありえない・・・、正しく強く生きるとは 銀河系を自らのなかに意識してこれに応じてゆくことである われらは世界のまことの幸福を索ねよう・・・」などと、素敵なお話を言ってくれる。

「夜鷹の星」や「銀河鉄道の夜」など、何度読んでも味わい深く、死生観を正されるなど、大正時代に書かれたとは思えない、新鮮でこれからの問題を提起してくれている。「植物医師」は劇の脚本で、農業における肥料や土作り、作物の生育などの相談や指導など、環境問題も含め農業指導員的な立場から、エピソードを展開する内容であったと思う。

かつて私が長く働いていた佐久病院の恩師若月俊一院長は、この宮沢賢治の農民演劇の手法を活かし、「演説するより演劇を！」と提唱して、「回虫」「保険証」「志願兵」など、自ら脚本を書きおろし、職員たちと演劇班を結成し、健康教育として農村をまわっていた。(昭和20~40年代)

それもあって長く私は、賢治は農村医学や公衆衛生の真髄を語っている人として尊敬していた。

しかし、福祉の世界に足を踏み入れて以来、賢治は広い意味の“福祉の元祖”ではないかと思うようになった。「福祉」は「幸せ・幸福」という意味を持ち、健康や平和など広い概念が含まれ、医療・保健・福祉を網羅した機能を含めていると考える。

彼の時代、「福祉」という言葉がどの程度出まわり、意識されていたかは不明であるが、あの「アメニモマケズ」に見るように、

「東に病気の子供あれば 行って看病してやり 西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を負い 南に死にそうな人あれば 行って怖がらなくてもいいといい 北に喧嘩や訴訟があれば つまらないからやめろといい・・・寒さの夏はオロオロ歩き・・・、そういう人に私はなりたい」

などと言うのだから、まさに、これはソーシャルワークであり、福祉のお仕事であろう。

5. 参加型の地域福祉をめざして

1) 地域通貨は出会いの道具

“ちょっぴり地域の役に立つ援助をしながら、仲間で暮らしを楽しもう” そんな合言葉で、八ヶ岳農協女性部の人たちと、地域助け合い活動「エンジョイらいふ」活動を始めて5年になる。八ヶ岳山麓の高原野菜地域5農協が合併してできた農協で、高齢化の進む村々の課題は健康と福祉の協働活動であった。しかし合併した5農協の支部はあらゆる点で格差が大きかった。県内有数の高原野菜王国である川上支部・野辺山・南牧支部の農業規模は、過疎に悩む南北相木村や小海支所の10倍と収入が一桁大きく、専業農家80%という若い高齢者のいる地域。

この中では町場にある小海支所は女性部がやや活発であるが、年齢は高齢者が多く、活動へのアンケート結果でも福祉活動への意向が高かった。この小海支所を中心に2001年、具体的な活動方法として、かねてから気になっていた「地域通貨」による援助の交換について提案してみた。農協生活部の担当者は、地域通貨自体がわからないことと、福祉活動の糸口が見つからないこともあって、あまり考えずにとにかくやろうと始まった。

仕組みを作るためにはまず「地域通貨」の理解が不可欠である。女性部会員メンバーにも地域の人々にも理解を得るため、ストーリーを作って演劇でもしようかと提案してみると、みんなやるというではないか。困りごとや助けて欲しいことができた時、なんでもお金で解決するのではなく、互いの持てる力や物・事を提供し、地域通貨で交換し合って、無駄なお金や手間を省いて豊かに暮らし、農業を安心して続けられる地域にしよう、といったストーリーである。できるだけ多くの人の出番を作り、“地域通貨でやさしい助け合い”という分かりやすい題で、町の「健康福祉祭り」に発表した。PR効果のほどは分かりかねるが、劇に取り組んだメンバーの結末と内容の理解が深まったことが重要で、この力がその後の事業推進の原動力になった。1ヶ月以上にわたり一緒に練習するのだから、その過程での作り上げるための工夫と協働は、やはり演劇の力はすごいと納得できた。そして、女性部の親睦旅行を滋賀県琵琶湖

周辺にした時は、地域通貨「おうみ」の視察を加え、静岡県浜松の時は「助け合い遠州」のしくみをきくなど、既存の活動に合わせて学習をみんなができるように工夫もした。宮城まり子さんが続けている「ねむの木村」では、子供たち一人ひとりが、痛々しく見える体を精一杯伸ばして、自己表現するダンス授業に遭遇し、自立の心を育てることの重要さを学び、切り開いて進むまり子さんの障害児教育の運動にみんな心から感激した。

ある時、100円野菜市に出荷している80歳を超える女性会員から、「野菜はたくさん作れて出荷したいけれど、年をとってきて自転車で運べなくなったので出荷を手伝って欲しい。」という要望がだされ、同じ出荷会員が家を回って出してくれることになった。「地域通貨」のしくみは、こういったちょっとした要望の表明の場があり、応じて上げられる手が見つかるという、出会いをつくり、やり取りを簡素に進める道具としての役割のあることが見えてきた。そうして〈1ハート：100円〉相当に当たる「ハート」という地域通貨が出来上がった。

「エンジョイらいふ」の最近の主な活動は外出援助と話し相手で、多くは何とか家で暮らしているものの、買い物や病院への受診を助けて欲しいというものである。買い物のついでに農協でお金を下ろし、役場で用を足すなど、2～3箇所を回りながら、家に帰り着いても荷物を台所まで持ち込んでもらえるなど、タクシーでは望めないきめ細かい要望に、寄り添ってもらえるこの助け合い活動は利用者に好評であった。一方、もと役場勤務で定年退職した女性会員は、「退職して社会に関わることはもうないと思っていたけれど、こんな風に、まだ自分にも役に立つことがあるなんてうれしい」といつてくれた。

2003年には野辺山など他支部でも活動が始まった。それほど活発ではないが今も少しずつ活動は継続している。

2) 下之郷老人クラブと学生との交流

地域保健という仕事の癖が抜けず、私は地域と結びついていないと、授業や実習指導が人々の気持ちから浮き上がっているのではないかと不安になる。大学に来て1年ほど経って依田發夫先生に

相談すると、やはり同じ思いでいるので、ゼミとして地域調査をするので一緒にどうかと進めてくださった。テーマは違うが同じ下之郷地区をフィールドにして地域活動をしようということになり、学生を地域に連れ出すゼミを開始した。

高齢化の進む地域において、寝たきりになってからの福祉ではなく、その前に少しでも家で元気に暮らしあう仕組みができないか、なんとか住民が参加する地域福祉の道はないか。「ねたきり予防」にむけて地域ぐるみの取り組みを、「地域通貨」が果たせるのではないかと考えた。

福祉学部を持つ大学がもっと地域に近づき、住民の人と安心して健康な地域づくりを一緒に探りたいと考えていたので、まず老人クラブと関わることになった。長野大学が所在する上田市下之郷地域には今も、会員数約150人の老人クラブ双葉会が活動を進めている。他の多くの地域が高齢化に伴って機能しにくくなり、活動停止またはゲートボールをやるのみの状態になっている中で、双葉会は生島足島神社の毎年の例祭などの、伝統をキチンと守り支えてきた人たちがメンバーになっていることもあり、定期的に役員会も開き、子供の指導などもやっていた。

地域調査となれば事前の段取りが前途を左右する。会長さんの理解、役員会の了解、名簿と地図で訪問する家の確認、何よりも調査内容の吟味と学生の理解、家庭訪問での挨拶やマナーの徹底などたくさんの階段を上りながら、目的地への到達ルートを確保しなければならなかった。そして、そういう過程を学生と一緒に参加させながら進めたことが、学生にはとても重要で新鮮な体験であったらしく、「人の家を訪問して目的を言って協力していただくまでが大変だった」、「挨拶が大事だと分かった」などと、自分と向き合い1人前の行動をとる勉強になったようだった。

また、会長さんのお宅に学生が全員でお邪魔し、地域の皆さんが長野大学に描いている学生像や、期待していることなどをうかがうチャンスがあった。その中で、「わたしたちはみんな年をとってきて、重い米袋が運べないとか、ちょっと畑に人手が借りたいなどという時があり、学生さんが助けてくれるとありがたいんだよ」というはなしがあって、「御用聞き訪問」が生まれた。

2004年度のゼミでの地域調査は、「御用聞き訪問」への要望や、「地域通貨」の活用への要望を内容に入れて実施し、その要望に沿って活動を展開した。

御用聞き訪問は普段は受け持ち制なので、1軒に1～2人の学生が都合の良い日に行くのだが、あるゼミの日の午後は、Iさんの家の大豆畑に向き、ゼミのみんなで畑の草取りをした。夏の青空の下、緑の中で列になって草をとる仕事は、久々のさわやかな風と空気に、汗ばんだ背中も癒され、心が穏やかになって、農作業の癒し効果を実感した。担当学生はその後仲間を誘っては大豆作業に出かけ、御用聞き訪問を楽しんでいるようだった。

調査の中で、多くは無いが「孤独」や「家で役割がなくつらい」といった声を、じかに出している方が何人かあり、長寿時代の老い方、老いさせ方がやはりこれからの課題であると思われた。学生の訪問に「何も用はしないでよいからお茶飲みなどの話し相手になって」という要望もあった。ゼミの方から「春の交流会」や「焼き芋大会」、さらに「脳生き生き講座」などを計画すると、じき30～40の方が誘い合って出席される。自らは計画できないけれど、身近な地域で触れ合う場があればできるだけ参加して、元気で暮らしてゆきたいという感じである。これは今の「介護予防」対象者よりさらに前の、予備軍の予備軍くらいな多くのお年寄りの心情のようである。

ただ気がかりなのは男性たちである。おしゃべりしたりお茶飲んで人と群れるということが苦手な、孤高な一匹狼を誇ってきた彼らは、お膳立てされた設定に乗って動かされるのが心地悪いらしく、なかなか参加してこない。そうかといって自ら企画する風もなく「余計なお世話はしない」と思っているのか、なかなか身分なしでの地域参加はしてこない。もっと参加しやすいいろいろなプログラムを、男性たち自身で用意する時代を作る必要があるだろう。

ともあれそんな男性を相手にしてられないので、参加してくる方々と、脳生き生き講座などで“自分の状態を知ろう”と、「脳の元気度テスト」や「歩く速度を量るテスト」などをしてゆくことになる。会場の都合でみんなの前で運動テ

ストをすることになっても、女性たちは自分の成績を一生懸命出そうと頑張ってくれて、プライバシーなどに拘泥しないで、お互いの状況の確認などをしてくれる。そして、脳ドリルや計算ドリル、体を動かすゲームや歌いながら腰を動かす「フリフリグッパ」などの体操も、それは一生懸命にやって、「前より点数が下がったので頑張らなくっちゃ。」などと帰ってゆく。これがきつと男性軍たちでは自分の成績にこだわって、改善に向けて努力する「みんなの1歩」の協同作業は、しにくいのではないかと懸念される。

この下之郷にある地域通貨「イクタル」を、協同課題にしている古田ゼミが作成してくださったので、大学祭の時から双葉会員に「イクタル」を発行することができた。地域のシンボルである「生島足島神社」から、「生く」と“足る”を使って、「イクタル」という名称になり、「生かしかい足るを知る」を理念にして支えあおうというわけである。お年よりと学生との活動で流通させようと、行事などに参加券のような形で使っていた。

高齢化の進む中で健康で快適な地域づくりとは、どんな形なら可能なのか、どこでも通用する形というよりは、その地域の歴史や発展の仕方、立地条件などでそれなりの形があるのかと思うようになった。せっかく大学がこの地にあって、学生を支えてもらっているのであれば、この学生集団や学問的資源をフル活用させて、地域の「福祉力」を高め、ここならではの「地域ぐるみの支えあい」をめざして、認知症や心筋梗塞、脳卒中、ガンなどで、若いうちから悩む人を少しでも減らし、介護で長く悩む仕組みから開放したいと願っている。学生が地域から学ぶことは沢山ありそうである。

6. 施設間格差と福祉労働

1) 実習学生の学びの格差

春休み、2回目の実習を終った3年生（すぐ4年になる）の、急な成長ぶりには驚かされる。あの1回目の実習に出る前の、おぼつかない自信なさそうな様子とは違って、2回目は利用者さんとのコミュニケーションもとれ、自分なりの実習課

題に向き合って、対人援助ができたためか、「楽しく実習ができた。」「終了の日に担当した利用者さんに、寂しいと泣かれてしまった。」「実習に出る前は、自分は現場に向いていないと思い込んでいたけれど、実際利用者と関わって援助ができることがうれしく、介護が面白いと思った。」などと言ってくれる学生が多くなる。これにはたぶん、若者に対するお年寄りの優しさが、彼らに少しの自信をもたらしてくれている部分も大きいのであり、ありがたい社会勉強である。

しかし彼らが学ぶ実習環境は、決して十分指導的に整備されているところばかりではなく、施設間格差はかなり開いている状況にある。そしてこれは実習環境というより、利用者自身にとってのそこでの利用環境・生活環境の格差に、ほかならないといっても過言ではないようである。

実習巡回で訪問した時、指導員や施設長の方が施設内を案内してくださるのだが、部屋を回っていった時の利用者の反応や顔つきに、大きな違いがあることが分かってきた。各階ごとにその方が利用者になんか声をかけて、ニコッと笑顔が返ってきたり、利用者のほうから寄ってきて手をつないで歩いたり、といった指導者のいるところに比べ、あまり利用者とのやり取りが無く、建物の説明などに終始する指導者では、実習終了後の学生の感想にもかなりの違いがある。それは認知症の多い棟かどうかの差ではなく、まして新しい建物かどうかでもない。管理的な立場にある職員と利用者の距離、心の交流度の違いのようなものである。これはまた、職員間の仲のよさ・交流の温度差に関わってくるようでもある。

2) 福祉労働の評価：大学の役割

特別養護老人ホームは施設の設立の歴史が長いところが多く、新しく設立されたところと、介護保険の仕組みやケアプランのねらいなどについて、職員全体の理解や実践にむけた改善方法にかなりの温度差がある。そして、はじめのシステムが定着しきれていないうちに、また介護保険のしくみが大きく改定され、人手の無さや運営上の混乱などの問題を抱え、職員教育にも施設間格差が大きくなってきている。そして、障害児・者施設

での運営はこれを上回る厳しさがあり、平成18年度からの自立支援法の導入がさらに輪をかけて、どんなに人手を要していても若者一人の給料が生み出せないから新採用を見送る、といった厳しさが卒業学生の新たな希望にふたをしてしまう。

いったい福祉労働の評価はなぜこうも低く置かれてきたのか。看護の歴史も長い戦いの歴史があったが、人間同士の役割分担からしても、給料とは何かが真剣に計算されあっていない。もう福祉労働に働く者たちが協働団結して、労働実態分析をしたり、患者の反応や意見をもとに利用者との合意を得つつ、「安心して安全な良いケアのために、働きやすい仕事の仕方を保障して欲しい」という共通認識で、仕組みを作る努力を始めなければならないだろう。

なんといっても働く職員の労働環境・労働条件とこれに見合う報酬が、職員の誇りと生きがいにつながるわけで、良い仕事のできる職場環境は、利用者の生活の快適性に連動する。利用者・家族と職員が対立している場合ではなく、一緒に改善の道を探らねばならない。

こうした今、大学はどういう役割をするべきか。地域の現状の理解なくして、教育や学問はありえない。理想の福祉の実現のためにも、現場に学生を送り出す責任として、教員としてどうしたらよいか、ずっと私はオロオロと悩んできた。そんな思いをゼミの学生に話したところ、「今年の卒業生たちの仲間で、自分たちの職場については是非実態を浮き彫りにし、これからの福祉の職場のあり方を考える材料にして、研究会をやろう」と言いだしてくれた。久しぶりに若者のこんな意見を聞くと元気が出る。私もフリーになったメリットを活かし、高齢化する国民を支えてくれる重要な人材としての福祉職員を、大事に支える住民の責務と考えても、一緒に取り組みたいと思う。彼らの結婚や子育てなどのライフスタイルにも関係するわけで、時代の変化と合わせつつゆっくと、地域と関わりあって長い歩みで行くことが大事だろう。

「福祉のお仕事」は福祉職員の問題というより、長寿時代の国民の将来にわたる、人間らしい生き方に関わる重大事を担っていると考える。